

越智康夫氏 タオル製織技術者



越智康夫氏



今治タオル業界のトラブルバスターこと、越智康夫氏が今回の「タオルびと」である。若い頃から織物製造にかかわる貴重な経験を積み重ね、貪欲に腕を磨いてきた。こうしていつの日か、「困ったときの越智頼み」として、越智氏はタオルのみならず綿布を製造するメーカーでもさまざまな問題を解決してきた。

軽快な語り口からは苦労を微塵も感じさせないが、戦中戦後の貧しく辛い時代を生きぬき、生きるために必死に目の前のことに集中してチャレンジしてきた結果、「さすらいのトラブルバスター」が誕生した。

おち・やすお ☆ 1937年3月、今治市花園町（現・室生町）生まれ。戦中の1943年4月に今治市立別宮国民学校に入学したのち、疎開先の鈍川村立鈍川国民学校に転校。今治市立鈍川中学校をへて1952年4月に愛媛県立今治工業高等学校紡織科に入学。紡織科では綿織物製造に関する基本的知識を学ぶ。同校を卒業後、1955年4月に松本綿布に就職。時代は綿布よりタオルに移行しつつあり、1958年6月に同社を退社し、タオルメーカー数社に勤務。そのなかでも15年間勤務した丸藤タオル（株）、同じく15年間勤務した森清タオル（株）においてタオルの企画開発・製造に従事。そして、1997年3月に森清タオルを定年満期退職。

1. 幼少期

今治空襲を受けて鈍川村に疎開

越智康夫氏は、1937年3月31日、今治市花園町（現・室生町）に父・良作氏と母・よね氏の3男として誕生した。上には姉4人、兄2人、下には弟1人がおり、子沢山の賑やかな家庭で越智氏は育った。父親は越智郡鈍川村（現・今治市玉川町鈍川）出身で、母親は北条市（現・松山市）出身であった。父親は、1級ボイラー技士免許を持っており織物工場のボイラーマンをしていたが、戦中は織物工場が軍事工場に転換され、軍隊の洋服などを縫う工場のボイラーマンとなった。父親も織物工場と縁があったように、花園町周辺には老舗の中忠（株）をはじめ織物工場がたくさんあり、幼少時代の越智氏は道端に落ちていた織物に使う部品でよく遊んだ。たとえば、ワイヤーヘルド（綜統系）をメガネに改造して遊んだ記憶があるが、そのときはこれが織物の部品だとは知らなかった。

1943年4月、越智氏は今治市立別宮国民学校（1947年に今治市立別宮小学校に改称）に入学したが、時代は第二次世界大戦の最中であり、貧しい生活を強いられた。また、つねに危険と隣り合わせであり、小学校3年生の5月8日に今治で2回目の大きな空襲があり、危機一髪の恐ろしい体験をした。5月初旬なので50cmほどしか伸びていない麦の畑に逃げ込んだが、数十メートル横で不発弾が落下した。不発に終わったからよかったものの、もし爆発していたら越智氏はこのとき命を落としていたかもしれない。

今治では、終戦の年の1945年に3回にわたって空襲があった。4月26日の1回目の空襲では、死者68名、重軽傷者124名、全壊家屋41戸・半壊家屋63戸の被害を出した。越智氏が麦畑に逃げ込んだ5月8日の第2回目の空襲では、午前7時30分からおよそ1時間、花園町、今治駅周辺、広小路など集中的に約70個の爆弾が投下され、死者29名、重軽傷者12名、全壊家屋43戸、半

壊家屋 98 戸という被害を出した。そして、8 月 5 日の 3 回目の空襲では、今治市街地のほとんどが焼け野原となり、死者 340 名、8,212 戸焼失（全市戸数 10,868 戸の 75.6%）、罹災者 34,200 名（人口 54,341 人のうち 63%）にも上り、もっとも大きな被害をもたらした（今治市役所都市計画課編『今治市戦災復興誌』今治市役所、1971 年）。

終戦までカウントダウンを迎えた日本は、この直後も多大な犠牲を払うことになる。8 月 6 日、今治と地理的にも歴史的にも係わりのある広島で原子爆弾がアメリカによって投下された。こうした戦争の悲しい記憶は、毎年 8 月になると越智氏の脳裏をかすめる。

越智家では、2 回目の今治空襲によって母親と下の 4 人の子供は父親の出身地である鈍川村に疎開することになった。疎開によって、越智氏は 1945 年 6 月に鈍川村立鈍川国民学校（1947 年鈍川村立鈍川小学校に改称）に転校した。父親と上の 4 人の姉兄たちは、今治市内で仕事に就いていたため今治に残った。終戦後、家族がみな元気で再会を果たせたのは不幸中の幸いであったが、戦争が人びともたらした傷跡は計り知れない。



四国霊場 55 番札所南光坊にある「今治市戦災の碑」

四方八方を山に囲まれた鈍川村に疎開した越智氏は、戦中という

こともあり、食べるものも十分になく、そばの実やサツマイモなどを主食にして空腹を満たした。戦後になっても食うのに必死の状態はしばらくつづいた。越智氏の小学校時代は戦争による辛い経験や体験ばかりだが、自然のものを自給自足して家族と一緒に食した時間は、貧しく辛い日々のささやかな楽しい思い出である。



鈍川溪谷（今治市観光課提供）

ある日、越智氏はマツタケを探しにひとりで山に入った。当時はたくさんのマツタケが族生しており、それを家に持ち帰るために履いていたズボンを脱いでズボンの裾をカズラで縛って袋にし、そのなかに溢れんばかりのマツタケを詰めて担いで帰ったことがある。また、小学校5年生のときには山へ行行ってウサギが通る道に罠を仕掛けて捕獲し、ウサギを下げて帰ったこともある。父親に「料理してくれ」と頼み、きれいに毛や皮を剥がれたウサギの肉は焼いても煮ても食べられた。今ではウサギを食すのは珍しいが、当時は貴重なタンパク源であった。

鈍川小学校を無事卒業した越智氏は、1949年4月に今治市立鈍川中学校に入学した。小学校と中学校は同じ場所にあったため、勾配のきつい山道で片道4kmの徒歩通学は中学校でも変わらなかつ

だが、学校生活が楽しかったから一度も苦しいとおもったことはない。3年生のときに、社会見学の授業で初めてタオル工場へ見学に行ったが、このときは将来自分がタオルづくりに従事するとは夢にもおもわなかった。

紡織科に入り織物の基礎を学ぶ

越智氏は、1952年3月に鈍川中学校を卒業後、同年4月に愛媛県立今治工業高等学校入学紡織科に入学した。鈍川村の自宅からさらに遠くなり片道20kmの道のりを自転車で通った。紡織科を選んだ理由は、「当時の紡織科は定員の枠が多く（当時で40名）、空いていたから」と越智氏は言うが、今治は昔から綿織物業が盛んな地域であり幼少時代から越智氏の身近なところに織物があったことや、中学3年でのタオル工場の体験学習、そして織物工場に勤めていた父親の良作氏の存在も大きい。

紡織科では、1、2年生で国語や数学などの一般科目に加え、糸から布までの一連の製造工程に関する織物の基本的な知識を座学と実習をとおして学習した。さらに、上級生になると実習時間が増え、3年生ではインターンシップ制度がカリキュラムに組み込まれており、近隣の紡績会社やタオル工場などに派遣されて実地経験を積めた。越智氏の場合は、夏休み期間の40日のうち30日間を東洋紡績（株）の第二工場で紡績や織布の製造について勉強し、冬休み期間の15日間を中忠の第二工場でタオルづくりについて勉強した。

東洋紡績では、現場のスタッフがそばについて「こうしなさい、ああしなさい」と指示してくれた。越智氏は、30日間一日も休まず工場に通い、綿糸のみならず他の素材の糸の生産工程について学んだり、工場に設置されていた豊田自動織機を操作したり、紡織科で学習した内容を土台に、さらに多くの知識や経験を得た。

中忠では、冬休み期間中を利用してインターンシップに参加した。年末年始を挟んでいたが、越智氏は従業員に混じってほとんど休み

なく午前8時から午後6時まで働いた。当時の職人の休みは月に2日程度で、現在のように年末年始のまとまった休暇はなかった。従業員と同じ仕事量をこなしていた越智氏であるが、大晦日は下っ端の従業員と一緒に庭のセメント塗りまで手伝う羽目になり、気が付けば除夜の鐘を工場で聞いて新年を迎え、夜が明けてから鈍川の自宅まで帰った。下っ端の従業員は中学校を卒業してすぐにタオル工場に就職して懸命に働いていたので、また同い年ということもあって、「お兄ちゃん、手伝え」と声をかけられたときは、「まあ、ええか」とおもって一緒に夜が明けるまでセメントを塗った。今では懐かしい思い出である。

東洋紡績と中忠のインターンシップをとおしてさまざまな実地体験を積めたことは、のちの越智氏のキャリア形成において大いに役に立った。（次号につづく）

